



3500年前縄文時代 中委員塚の墓



古墳時代市之代6号墳馬形埴輪

年表にみる取手と藤代のあゆみ

7月21日(火)～9月27日(日)

午前10時～午後4時30分 会期中無休

講演会のある7月25日、9月20日は午後6時まで 入場無料



江戸時代初期 寺多村左衛門墓次のみ



昭和36年 藤代駅常磐線輸電化記念

平安時代末期 和鏡

江戸時代 取手宿本陣



※赤字はコミュニティバス停

交通

取手駅東口から大利根交通バスで吉田下車、または関東鉄道バスの龍ヶ崎駅、光風台行きで青柳南下車、藤代・光風台方面からは関東鉄道バスの取手駅東口行きで青柳南下車、いずれからも徒歩約10分
コミュニティバス小堀循環ルート新道郵便局下車徒歩約10分、中央循環ルート吉田中央下車徒歩約5分、東南部ルートJAとりで前下車徒歩約8分

Eメール: maibun@city.toride.ibaraki.jp

問合せ先: 埋蔵文化財センター 取手市吉田 383 番地 TEL 0297-73-2010 FAX 0297 (73) 5003

開館10周年記念企画展「年表にみる取手と藤代のあゆみ」開催にあたって

わたしたちが踏みしめる大地には、ながい年月が刻まれています。人々が訪れ、去ってゆく時間を大地は記憶しています。

取手・藤代の歴史は、北相馬丘陵に残された2万7千年前の旧石器時代の打製石斧から始まります。縄文時代には多くの貝塚が出現します。気候が暖かくなり、縄文早期には、海進現象で台地の近くに海岸があり、当時の貝塚から海の貝が出土します。前期や中期の小さな貝塚は、後期には中妻貝塚のように大きな貝塚となります。それは大きな村づくりの始まりでした。

弥生時代・古墳時代には、農耕生活をもとにした社会ができました。取手に弥生時代遺跡は一つですが、古墳時代に突帯文のある壺を出土した大渡遺跡、重圏文鏡を出土した大山遺跡など大きな集落が出現しました。6世紀には多数の埴輪を出土した市之代古墳群、糠塚古墳群がつくられました。奈良・平安時代になると、市内の各地に集落が出現します。なかでも基五郎崎遺跡からは墨書土器、下高井向原遺跡からは平安末期の瑞花双鳳五花鏡などの貴重な資料が発見されました。

中世には、下高井城や大鹿城、小文間城など「とりで」という地名にふさわしく、多くの城館がつくられました。市内最古の建造物、竜禅寺三仏堂は戦国末期の建造物です。

江戸時代になり、岡堰がつくられ新田開発が進み、村が成立しました。水戸街道が通り、取手と藤代には本陣が置かれ、利根川の水運が発達し、水陸交通の要となって、この時代に取手の地域性が確立しました。

明治以降も、利根運河、鉄道の開通や大利根橋の架橋など取手町を特色付ける発展により現代取手市の基礎が築かれました。

当館は、今年で開館10周年を迎えることができました。これは、企画展や講演にご協力いただきました、みなさま、なにより、展示のたびに当館に足をお運びくださいました、みなさまのお陰です。深くお礼を申し上げ、開催のあいさつとさせていただきます。

平成21年7月

取手市埋蔵文化財センター

講演会:日時:7月25日(土)、午後1時30分から

「古代伝承と歴史の世界 ー国楽・佐伯の伝承と将門の伝承ー」

古代史のなかで、伝承とされてきた資料から古代人のメッセージを読み取り、隠された古代史の謎に迫ります。

講師:志田諄一氏(茨城キリスト教大学名誉教授)

講演会:日時:9月20日(日)、午後1時30分から

「関東に古墳がつくられたころ ー大王はどのように東国を支配したかー」

「倭建命の東征」で伝えられる畿内王朝の東国支配について、「王賜」銘鉄剣、特殊器台埴輪など新発見により東国古墳文化成立の謎を解き明かします。

講師:大塚初重氏(明治大学名誉教授)

***各講演会、会場は福祉交流センター多目的ホール、定員は160人(当日受付順)**

展示説明:毎週、土曜と日曜日の午前11時と午後2時から展示室で職員が解説をおこないます。(30分くらい) 予約不要、当日展示室においでください。

例言

1. このパンフレットは、平成21年7月21日から9月27日まで開催される取手市埋蔵文化財センター第26回企画展「年表にみる取手と藤代のあゆみ」にともない、発行されたものです。
2. この企画展の企画とパンフレットの執筆・編集は、当センター職員の宮内良隆(第1章、第2章)・飯島章(第3章、第4章、第5章)が担当し、その他職員の協力を得ました。
3. この企画展の開催にあたり、次の方々からご協力をいただきました。記して深謝の意を表します(敬称略)。海老原千義、海老原恒久、木村廉、杉澤萬造、梁野修、根本彰、故成島志げ、野々下甲子男、平本重喜、広瀬篤、取手市藤代商工会、本願寺

お問合せ:埋蔵文化財センター ☎ 0297-73-2010 FAX 0297(73)5003

Eメール: maibun@city.toride.ibaraki.jp

取手年表 旧石器時代から平安時代まで

	年代	世界・日本のできごと	取手の遺跡・できごと
旧石器時代	B. C. 27, 000	礫器・石斧	市之代遺跡
	B. C. 26, 000	ナイフ形石器	大山 I 遺跡・柏原遺跡
	B. C. 15, 000	岩宿遺跡、尖頭器石器 * フランス・ラスコー洞窟の壁画	東原遺跡
	B. C. 12, 000	細石刃石器	柏原遺跡
縄文時代	草創期 B. C. 10, 000	有舌尖頭器（隆起線文土器） * 世界的な温暖化 夏島貝塚、東京湾西岸の斜面貝塚	大山遺跡・柏原遺跡
	早期 B. C. 8, 000	沈線文系土器 温暖化で海面上昇し、最大海進（海進現象） 各海岸地域に貝塚がつくられる	下高井向原 I 遺跡、貝ブロックがつくられる 大渡遺跡、貝ブロックがつくられる
	前期 B. C. 6, 000	鳥浜貝塚（福井県若狭湾）、低地貝塚 漁労が最大発達	向山貝塚、住居内に廃棄された貝層で地点貝塚がつくられる
	中期 B. C. 3, 500	陸平貝塚、霞ヶ浦西岸最大の貝塚がつくられる 加曾利北貝塚、東京湾東岸最大の貝塚がつくられる	西方貝塚、地点貝塚が広がる。2 段掘込み住居から大型石棒が出土 台宿貝塚に斜面貝塚がつくられる（？）
	後期 B. C. 2, 200	加曾利南貝塚、大規模な環状貝塚がつくられる 土偶が盛んにつくられる 製塩がはじまる（製塩土器が出土）	B. C. 2, 200 中妻貝塚（後期初頭）AMS 測定年代 中妻貝塚、101 体の再葬墓がつくられる B. C. 1, 838 中妻貝塚（後期前半）AMS 測定年代
	晩期 B. C. 1, 200	大洞貝塚、岩手県大船渡湾につくられる 日本各地に大洞式土器が広まる	中妻貝塚が終わる 神明遺跡 C 地点で大型住居と柱穴がつくられる 神明遺跡 A 地点、市内で最後の縄文時代遺跡
弥生時代	B. C. 300	稲作・青銅器・鉄器・機織（はたおり）が伝わる * 前 221】秦の始皇帝、中国統一 * 前 202】漢が中国統一	
	1～3 世紀	57】倭奴国王、後漢に使者、金印を受ける 147】倭国大乱 188】邪馬台国、卑弥呼、擁立 239】邪馬台国、卑弥呼が魏に遣使（景初 3 年） 247】邪馬台国、卑弥呼死す	東原遺跡・柏原遺跡に住居がつくられる
古墳時代	4 世紀	369】百濟、倭王に七支刀を贈る 391】倭軍が朝鮮の百濟・新羅を攻める	大渡遺跡、突帯文壺形土器が出土 大山遺跡、重圈文鏡が出土
	5 世紀	414】広開土王碑建立 大阪、陶邑（すえむら）で須恵器生産が始まる。 471】稻荷山古墳出土鉄剣銘	
	6 世紀	502】倭王武（雄略天皇）が征東将軍を授けられる 538】百濟より仏教が伝来 587】蘇我氏が物部氏を倒す 592】推古天皇即位、聖徳太子摂政となる	市之代 3 号墳（6 世紀前半） 糠塚 1 号墳、糠塚 2 号墳（6 世紀中頃） 糠塚 3 号墳、大日山古墳群、市之代 6 号墳（6 世紀後半）
飛鳥時代	7 世紀	奄角寺岩屋古墳（千葉県印旛郡） 645】大化の改新 672】壬申の乱 700】那須国造碑	市之代 8 号墳（7 世紀前半）
奈良・平安時代	8 世紀	701】大宝律令の制定 710】平城京へ遷都（奈良時代始まる） 741】国分寺建立 794】平安京へ遷都（平安時代始まる）	後原遺跡、鉄斧が出土 台宿二本松遺跡 北中原遺跡 新屋敷遺跡
	9～12 世紀	801】征夷大將軍坂上田村麻呂が出陣 935】平将門の乱 1051】前九年の役 1085】後三年の役、源氏の東国基盤の成立 1130】相馬御厨の成立 1185】平氏滅亡、守護・地頭の設置 1192】源頼朝、征夷大將軍となる	北中原遺跡、墨書土器「深田」「井」が出土 甚五郎崎遺跡、墨書土器「庄」「三」「袋」「山本」「得」が出土 新屋敷遺跡、墨書土器「西」「寺」が出土 南中原遺跡、墨書土器「寺」が出土 下高井向原 I 遺跡、瑞花双鳳五花鏡が出土

第1章 狩猟と採集の時代

旧石器時代 ヒトはものを握る能力を生まれつきもっています。そこから石を握り、ものを叩き、切断し、割るという技術を習得して人類の歴史が始まりました。

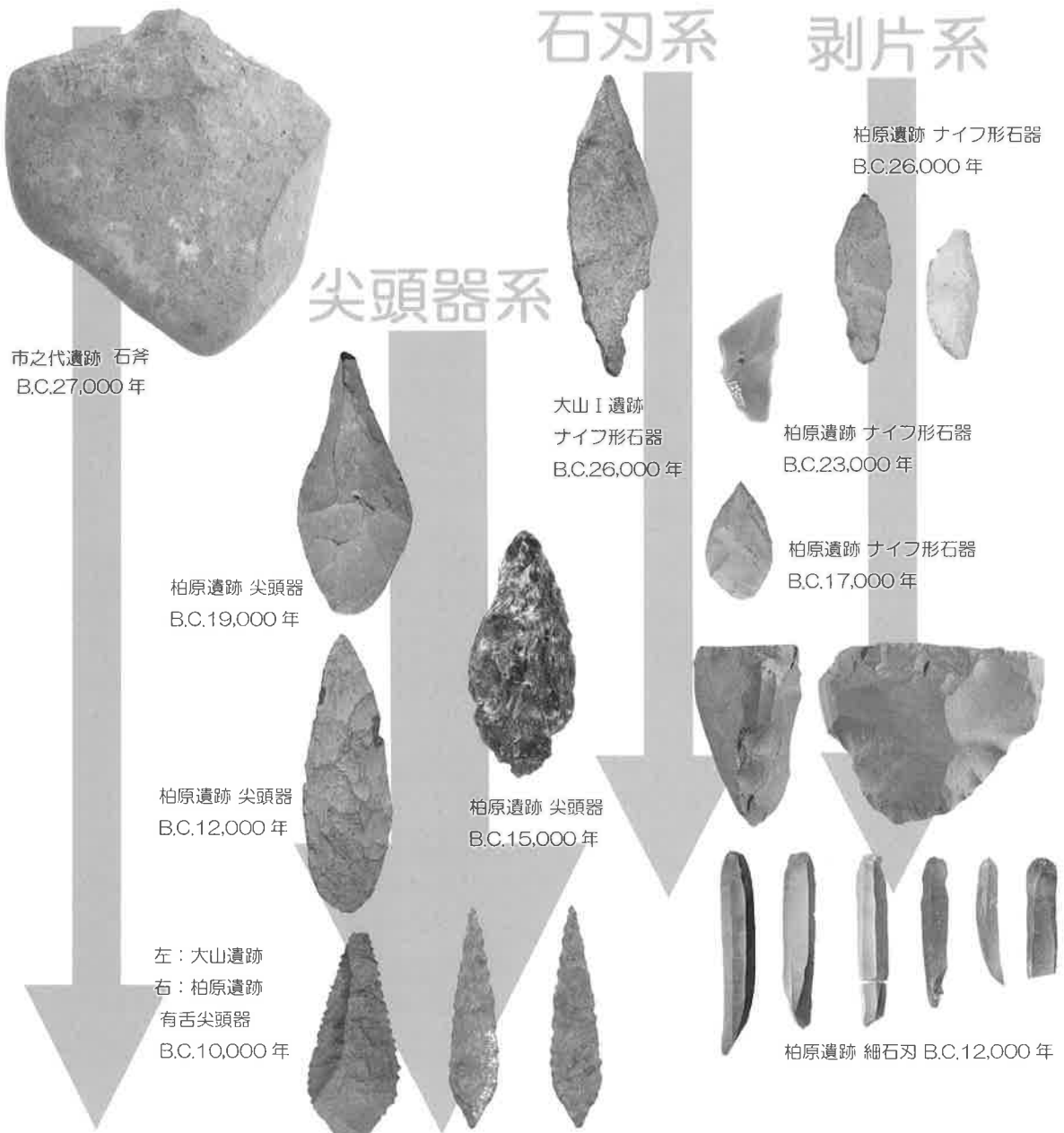
大昔、ひとは風雨が強いときや猛獣から身を守るときに洞窟や岩陰を使いました。そこには崩れた崖から石ころが落ちていました。ひとりが石の欠けらを手にとり、打ちつけてみて自分の拳やツメなどに比べはるかに強力な武器になることに気がつきました。こうして石を握り、たたきつけて使うことで石器の使用がはじまりました。最初の石器は、洞窟や岩陰に落ちていた礫のなかから、使われた石でした。これらの石のうち、持ちやすく使いやすい形の石を探すことから、さらに一部を加工し、使いやすいように形を整えることで、使われた石器から作られた石器へ発展しました。石器を作るために石を打ち割ると、母体となる石核と、小さな破片に分かれます。石核は斧として使われましたが、小さな破片も鋭い縁が爪のように使えることがわかりました。こうして、2種類の性質の違う石器ができました。

やがて狩の道具として槍が発明されると、先端にするどい破片が使われるようになり、槍先・尖頭器の製作に必要な、たくさんの剥片をとるため、石の割り方が工夫されました。

大きな石器をつくるには、石のある場所に行って石を加工し、完成した石器を運びましたが、狩を続ける生活では、石核を持ち歩き、必要なときにそこから剥片を作り出すようになりました。

最初に拾われた石のかけらは長い工夫のすえ、細石器の高度な技術に発展していきました。

取手市では4ヶ所の旧石器時代遺跡で石器が出土・採集されていますが、市之代遺跡を除く3つの遺跡は、相野谷川流域



にあります。これらは単独の遺跡というより、相野谷川流域全体を移動して生活する集団と考えられます。

市之代遺跡 B.C. 27,000年 取手市内で最も古い石器が採集されました。小貝川に臨む、右岸の標高18mの台地上にあります。安山岩製の打製石斧と礫器が出土しています。

柏原遺跡 B.C. 26,000～10,000年 標高20～23 mの小貝川右岸の台地上にあります。細石刃石器群の石器製作跡が4ヶ所見つかっています。ほかにもナイフ形石器や尖頭器、有舌尖頭器が出土しています。

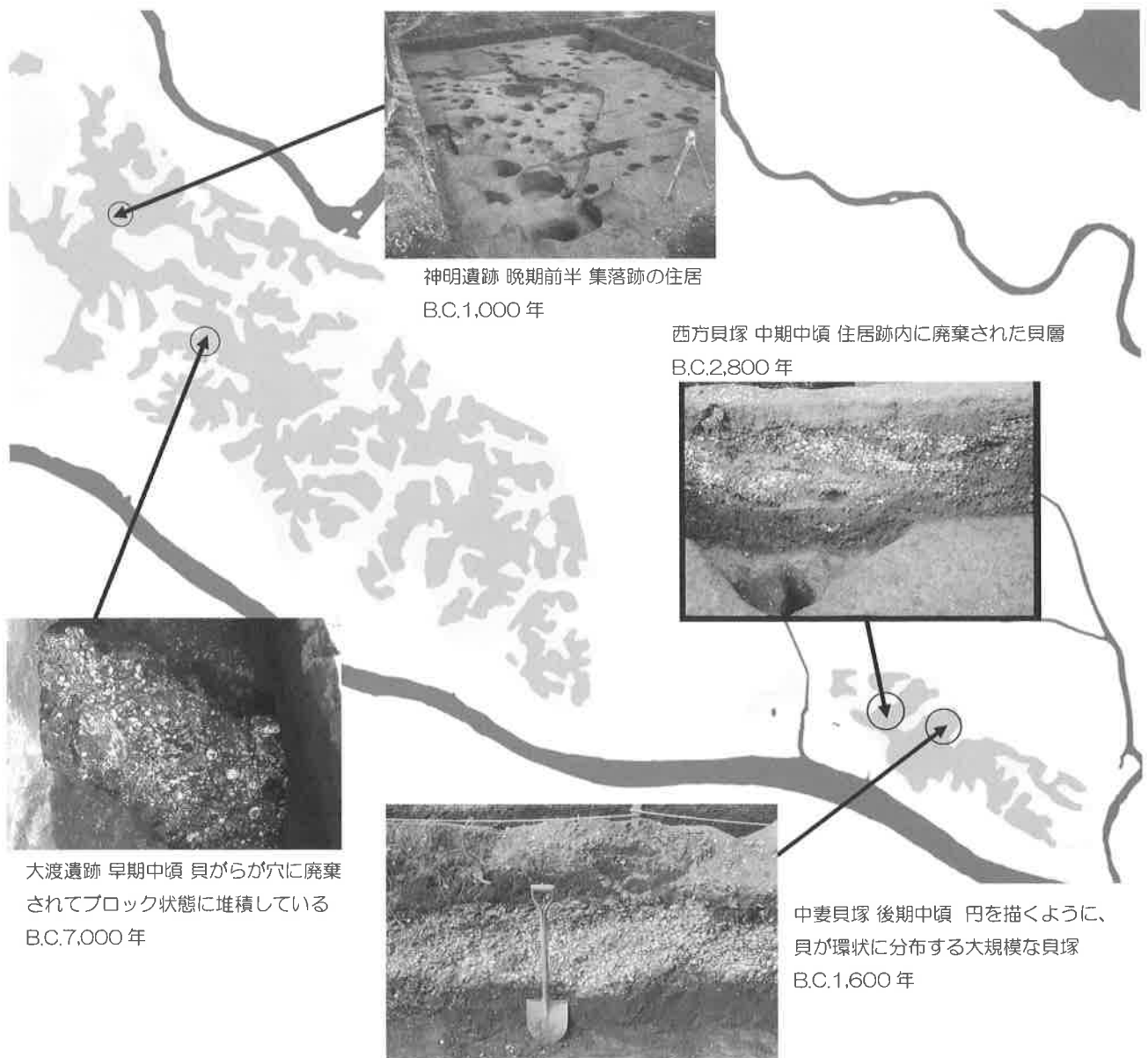
大山遺跡 B.C. 26,000～10,000年 ナイフ形石器と縄文時代草創期（隆起線文段階）の有舌尖頭器が採集。

東原遺跡 B.C. 15,000～10,000年 槍先形尖頭器と縄文時代草創期（隆起線文段階）有舌尖頭器が採集。

縄文時代 氷河期が終わると、気候が温暖化して海進現象がおこります。陸続きであった大陸と列島は海で切り離されます。しかし人々は、舟を使って海を渡り、各地と結ばれるようになります。温暖化は、食料の獲得に大きな影響を与えて、漁労・植物採取が大きな割合を占めるようになりました。

取手市の縄文時代遺跡の特色は貝塚といえます。北相馬丘陵の台地上に、大小さまざまな貝塚がつくられました。利根川や小貝川をさかのぼってゆくと、上流にある貝塚が古く、下流の貝塚は新しいことがわかります。また、貝塚には、食べた貝を捨てただけの小規模な貝塚と、中妻貝塚のように意識してつくられた大きな貝塚があります。

早期の大渡遺跡や下高井向原遺跡からは海で採れる貝がひとかたまりで捨てられていました。海進のため海岸線が、近くまできていたことがわかります。さらに前期の向山貝塚や中期の西方貝塚では、住まなくなった住居跡に貝を捨てていました。ここでは海の貝や汽水産のシジミが混じていました。また釣り針や銚などの漁労具が発見され、近くの海岸から漁



に出かけていた光景が想像できます。

後期中妻貝塚は汽水産のシジミと、淡水産の貝の混じった貝層が台地全面に分布しています。すでに海岸線が後退して、台地下の低地には川から流れ込んだ大きな湿地が広がっていました。ここで淡水魚を採り、川を舟で辿って内海である霞ヶ浦まで出かけて漁をしました。

中妻貝塚は、C地点の調査で、さまざまなことがわかりました。大規模なだけでなく、後期初頭から晩期初頭まで、途切れることなく長期間継続して形成されたことが特徴です。貝塚は、平坦なテーブル状台地の、自然にできた窪地の周囲に環状に形成されました。最初に、もっとも高い窪地の縁に遺構をつくり、だんだんに内側の低い部分に遺構をつくりました。そこに覆土として貝層が堆積しました。台地の外側でなく、窪地内側の斜面に厚い貝層が形成されました。貝層は自然地形の斜面ではなく遺構面に廃棄され、水平に堆積しました。

中妻貝塚 G 地点で、後期前半で直径2mほどの土坑に100体以上の人骨が収められた再葬墓が発見されています。今回 C 地点で、後期前半の貝層下から屈葬人骨が3体、後期初頭の層から埋甕に納められた胎児骨が出土しました。

さらに C 地点では、炭素年代測定をおこないました。中妻貝塚で、最も古い後期初頭（称名寺式土器）の土器捨場と炉穴から出土した炭化物で B.C. 2, 200年と B.C. 2, 129年、その層の上に堆積した後期中頃（加曾利 B 1式土器）の混土貝層10層と11層から出土した炭化物で B.C. 1, 846年と B.C. 1, 838年、の測定年代ができました。

その後、人々は生活の中心を神明遺跡に交代しました。もう大きな貝塚は作りませんが、大きなムラづくりは神明遺跡に引き継がれ、発展しました。大型の住居跡や、大きな柱を想像させる深い柱穴が発見されています。すでに食料獲得を貝採取に頼ることはなかったのでしょうか。ただし、クジラの骨・アワビが出土しているので、海に漁に出かけていたことはわかっています。神明遺跡が市内で縄文時代最後の遺跡です。



左：大渡遺跡 早期中頃
炉穴 B.C.7,000 年
(穴の底が熱で赤く焼けている。
複数の穴が重複している)



右：西方貝塚 中期中頃
住居跡 B.C.2,800 年
(隅角が丸い長方形、2段
に掘り込んでいるのが特徴)



中妻貝塚 C 地点 後期前半 B.C.2,000 年 (発掘前一面に貝が散布している)



中妻貝塚 C 地点 炉跡 B.C.2,000 年
(貝層の下から発見、貝層と同時期)



中妻貝塚 C 地点 土器廃棄坑
B.C.2,200 年 (貝層下から発見、
年代測定をおこなった)



中妻貝塚 C 地点 (表面発掘後で貝層の分布がわかる)



中妻貝塚 C 地点 埋甕 B.C.2,200 年
(貝層下から発見、胎児骨が納められ
ていた)



右：
神明遺跡
晩期前半
B.C.1,000 年 (大きな建物があつたこ
とがわかる柱穴)

第2章 農耕社会の成立

弥生時代 紀元前3世紀ころ、大陸から稲作技術をもった人々が日本列島に移住して、弥生時代が始まり、稲作・青銅器・鉄器・機織などの技術が急速に普及しました。こうした豊かさは、一方で国ごとの貧富の格差を生んで、後半期には、倭国大乱と呼ばれる軍事的な衝突が繰り返されることになり、卑弥呼のような新たな指導者が誕生しました。

市内では東原遺跡・柏原遺跡で住居跡が発見されています。

古墳時代 古墳時代は4世紀から、各地の豪族が大王のもとに、ひとつの国に統一されてゆく過程で、豪族墓である古墳が次々とつくられた時代です。市内では、この時代の初期に大きな集落がつくられました。大渡遺跡は4世紀前半の住居跡21軒からなる集落で、住居プランは隅丸長方形と方形の2種類があります。第10号住居跡から一括破碎土器が出土し、そのなかに突帯文壺形土器がありました。大山遺跡は4世紀中頃の住居跡50軒からなる大集落で、住居プランは方形でした。第37号住居跡から重圏文鏡が出土しました。

6世紀になると、古墳は一般的な豪族の墓として地方でも盛んに作られ、市内には市之代古墳群、糠塚古墳群、大日山古墳群があります。これらの豪族が武人であったことは埴輪の姿や古墳の副葬品でわかります。市之代3号墳は6世紀前半、糠塚1号墳・糠塚2号墳は6世紀中頃、大日山古墳群の仏島山古墳・糠塚3号墳・市之代6号墳は6世紀後半、市之代8号墳は横穴式石室で7世紀前半のものと思われます。糠塚3号墳・市之代6号墳の周溝から6世紀末頃の須恵器（平瓶）が出土していますが、これは市之代6号墳の場合、石棺に9体の追葬があったので、初期の埋葬から、最終の埋葬まで長期間に渡ったことを示しています。

律令制の時代 645年の大化の改新から、古墳時代の地方豪族支配は終焉し、律令にもとづく政治がおこなわれるようになりました。しかし、地方豪族の支配がなくなった代わりに、国の特権階級となった貴族があらわれ、不満をもった地方勢力が各地で乱をおこすようになり、次の武士の時代に移って行きます。

この時期、市内の集落から墨書土器（ぼくしょどき）が出土しています。土器に墨（すみ）で文字や絵を描いたもので、地名、人名、施設に関する文字が見られます。北中原遺跡で9世紀前半頃の土器に「深田」「井」の字が見られます。「井」は現地名の「高井」「井野」にあてはまりますが、記号とも見えます。南中原遺跡、新屋敷遺跡では10世紀頃の土器に「西」「寺」の字があり、現地名の「寺田」「寺原」にあてはまります。

甚五郎崎遺跡では1軒の住居から出土した9世紀後半の土器に「庄」「三」「袋」「山本」の字がみられ、施設・数量・番号・単位など荘園の管理に関連するのではないかと思います。隣接する下高井向原1遺跡では平安時代末の和鏡、瑞花双鳳五花鏡を出土しています。近くには中世の下高井城跡が存在することから、古代から中世に移行する過程がわかる地域といえます。



糠塚1号墳（6世紀中頃）前方後円墳、手前が前方部
小規模で墳丘の高さが低いことは市之代3号墳と共通する特徴



糠塚3号墳（6世紀後半）円墳、盛土はなく周溝だけ



大渡遺跡 10号住居跡（4世紀前半）
隅がやや丸い方形で、長辺中央に出入りした跡が残っている



南中原遺跡（9世紀前半）壁にカマドがつき、反対側に出入りの階段がつく



突帯文壺形土器を出土した大渡遺跡
10号住居跡の土器出土状態



市内の古墳時代遺跡の分布



大山遺跡 重圈文鏡 4世紀中頃



大渡遺跡 突帯文壺形土器 4世紀前半



糠塚2号墳 木棺直葬 6世紀中頃



市之代6号墳 石棺 6世紀後半



糠塚1号墳 武人埴輪 6世紀中頃



市之代6号墳 琥珀玉・ガラス玉 6世紀後半

糠塚2号墳
直刀
6世紀中頃
全長 107cm
刃渡り 86cm



糠塚3号墳周溝 須恵器(平瓶) 7世紀初



市之代8号墳 横穴式石室 7世紀前半



北中原遺跡「深田」9世紀



北中原遺跡「井」



南中原遺跡「寺」10世紀



新屋敷遺跡「西」10世紀



新屋敷遺跡H4号住居「寺」



甚五郎崎遺跡「庄」



甚五郎崎遺跡「三」



甚五郎崎遺跡「袋」



甚五郎崎遺跡「袋」



甚五郎崎遺跡「庄」



甚五郎崎遺跡「山本」



後原遺跡 鉄斧 8世紀



下高井向原I遺跡 瑞花双鳳五花鏡（ずいかそうほうごかきょう）と刀子（とうす）12世紀

取手年表 鎌倉時代から現代まで

時代	年代	日本史のできごと	取手のできごと
	大治 5 (1130)		平経繁、相馬郡布施郷を伊勢皇太神宮(内宮)に寄進し、相馬御厨が成立する。
鎌倉時代	建久 3 (1192)	源頼朝、鎌倉幕府を開く。	
	弘安10 (1287)		関東下知状に、相馬御厨の内に稲村が出ている。取手市域の地名が歴史上初めて現れる。
	元亨 3 (1323)		相馬重胤が下総流山から奥州行方郡に移り奥州相馬氏が始まる。
室町時代	建武元 (1334)	鎌倉幕府滅び、建武の新政始まる。	
	建武 3 (1336)		斯波家長奉書に大鹿・高井の村名が出ている。
	建武 5 (1138)		足利尊氏袖判下文によれば、戸頭村は尊氏の領地となる。
	観応 3 (1352)		足利尊氏は、戸頭村を香取社に寄進する。
	応仁元 (1467)	応仁の乱が始まる。	
	永禄 4 (1561)		『常総戦蹟』によれば、小文間城主一色宮内は、大鹿城主大鹿太郎左衛門を攻め、敗れる。
	永禄12 (1569)		米ノ井の龍禅寺三仏堂に打ち付けられた木札の年号。
江戸時代	天正18 (1590)	小田原の後北条氏は滅び、徳川家康が江戸に入る。	
	慶長元 (1596)		本多作左衛門重次、井野に没する。
	寛永 2 (1625)		関東郡代の伊奈忠治は山田沼堰をつくる。
	寛永 6 (1629)		関東郡代の伊奈忠治は鬼怒川と小貝川を分離する。
	寛永 7 (1630)		関東郡代の伊奈忠治は岡堰をつくる。
	寛永11 (1634)		関東郡代の伊奈忠治は新田開発した村むらの検地を行なう。
	寛文 6 (1666)		利根川大洪水。取手の町並みは利根川と平行に改められる。
	延宝 6 (1678)		徳川光圀が藤代宿に泊まる。
	天和 2 (1682)		徳川光圀が取手を通る。
	貞享 4 (1687)		水戸徳川家が染野家を本陣と定める。
	元禄10 (1697)		大鹿村の水戸街道移住が終わり、取手宿が形成される。
	享保 7 (1722)		福岡堰がつくられる。
	嘉永 6 (1853)	ペリーの来航。	
	安政元 (1854)	ペリー再来航。日米和親条約が結ばれる。	
	安政 5 (1858)	日米修好通商条約が結ばれる。	
	文久 3 (1863)		宮和田勇太郎胤影らは、京都等持院の足利三代将軍の木像の首を三条河原にさらす。
	元治元 (1864)	天狗党の騒乱。	
	慶応 3 (1867)	徳川慶喜は大政奉還を行なう。王政復古の号令出される。	
明治時代	明治元 (1868)	戊辰戦争始まる。江戸開城。	常陸知県事・下総知県事が任命される。
	明治 2 (1869)		葛飾県・若森県が設置される。
	明治 4 (1871)	廃藩置県。改置府県。	印旛県・新治県・茨城県が設置される。
	明治 6 (1873)		印旛県と木更津県が合併して千葉県が設置される。
	明治 8 (1875)		新治県が廃され、取手市域の町村はすべて茨城県になる。
	明治20 (1887)		利根運河会社が設立される。岡堰がレンガ堰に改修される。
	明治21 (1888)		利根運河開削の工事が始まる。
	明治22 (1889)		町村合併により取手町・相馬町ほか9か村が成立する。
	明治23 (1890)		有限会社取手商社設立。利根運河竣工。
	明治27 (1894)	日清戦争(～明治28)	取手商社の金融部門が取手銀行となる。
	明治29 (1896)		日本鉄道土浦線の田端・土浦間が開業し、取手駅・藤代駅が開業する。
	明治30 (1897)		取手運送会社、取手石炭合資会社設立。
明治32 (1899)		取手倉庫株式会社設立。岡堰のレンガ堰が修築される。	
明治37 (1904)	日露戦争(～明治38)		
大正時代	大正 2 (1913)		常総鉄道の取手・下館間が開業する。
	大正 3 (1914)	第1次世界大戦始まる(～大正7)	
	大正12 (1923)	関東大震災。	
	大正13 (1924)		海軍飛行船SS3号が戸頭上空で爆発・墜落する。
昭和時代から現代	昭和 2 (1927)	金融恐慌が起こる。	
	昭和 3 (1928)		大利根橋の工事が始まる。
	昭和 4 (1929)	世界大恐慌が起こる。	
	昭和 5 (1930)		大利根橋が完成する。
	昭和 6 (1931)	満州事変が起こる。	
	昭和 7 (1932)	5. 15事件起こる。	
	昭和 8 (1933)	日本は国際連盟を脱退する。	
	昭和11 (1936)	2. 26事件起こる。	
	昭和12 (1937)	日中戦争始まる。	
	昭和16 (1941)	日本はアメリカ・イギリスなど連合国と開戦。	
	昭和20 (1945)	日本は連合国に無条件降伏する。	
	昭和22 (1947)		取手町と井野村が合併して取手町となる。
	昭和24 (1949)		常磐線の松戸・取手間が電化される。
	昭和25 (1950)		小貝川が高須地区で決壊する。取手町水防団の尽力により市街地への浸水を食い止める。
昭和30 (1955)		町村合併で取手町と藤代町ができる。	
昭和36 (1961)		常磐線の取手・勝田間が電化される。	
昭和39 (1964)	東京オリンピックが開催される。		
昭和45 (1970)	大阪万博が開催される。	取手町は取手市となる。	
昭和48 (1973)		藤代町で相馬野馬追が開催される。	
平成17 (2005)		取手市と藤代町は合併して取手市となる。	

第3章 武家と農村

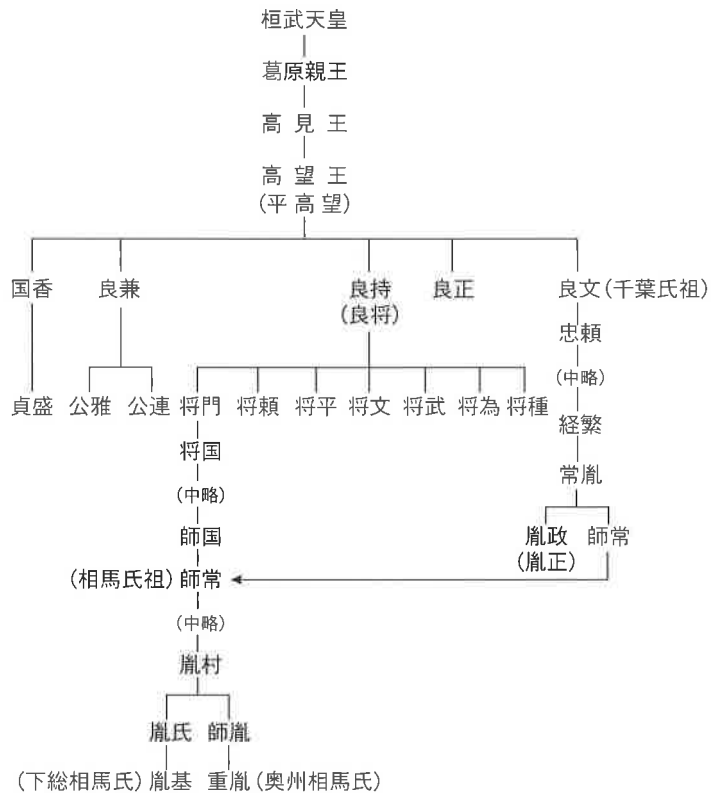
大治5年（1130）、平経繁（常重とも呼ばれます）は、自分の領地の相馬郡布施郷を伊勢皇太神宮（内宮）に寄進します。これが、相馬御厨の成立です。建久3年（1192）に源頼朝が征夷大将軍となり、鎌倉に幕府を開く約60年前ですが、ここに取手市域の中世が始まります。

経繁の子が、千葉氏の祖とされる常胤です。千葉氏は、平将門の叔父にあたる平良文を祖としています。千葉氏の系図によれば、良文は叔父でありながら甥である将門の養子となったと伝えられています。

千葉常胤の次男の師常が、相馬氏の祖となります。師常は、将門の直系の子孫である師国の養子となり、相馬御厨の支配を任されて相馬氏を名乗ったとされています。相馬氏は、後に下総相馬氏と奥州相馬氏の二つに分かれます。元亨3年（1323）、相馬重胤が下総流山から奥州行方郡に移ったのが、奥州相馬氏の始まりとされています。毎年7月23日から25日にかけて、福島県南相馬市で行なわれる相馬野馬追は、将門が行なった軍事訓練が始まりで、重胤が伝えたものとされています。昭和48年（1973）には、当時の藤代町商工会が中心となって相馬野馬追を招きました。藤代町内を騎馬武者が行列して、小貝川の河川敷で勇壮な神旗争奪戦が催されました。

取手の地名が歴史上初めて現れるのは、弘安10年（1287）10月24日の「関東下知状」です。ここには、相馬御厨の中の村として「稲村」が書かれています。また建武3年（1336）11月22日の「斯波家長奉書」には、「大鹿」、「高井」の村名が出てきています。この内大鹿は相馬孫六郎の領地でしたが、孫六郎は南朝方についたため、足利尊氏により相馬孫次郎親胤の領地となったものです。さらに建武5年8月10日の「足利尊氏袖判下文」には、相馬御厨内の村として「戸頭村」が出てきます。この時戸頭村は足利尊氏の領地となり、次いで観応3年（1352）7月13日、尊氏から香取社（現在の香取神宮）に寄進されています。13世紀以降、台地上の村の名前がようやく古文書に現れてきますが、この時代の村の歴史は、具体的にはほとんどわかりません。

桓武平氏、千葉氏、相馬氏略系図



『将門記』、『尊卑分脈』などより作成。左側が兄。



昭和30～40年代前半頃の大鹿城の遠景 (取手市教育委員会所蔵)



高井城跡に鎮座する妙見八幡宮
千葉氏・相馬氏は妙見菩薩を信仰していました。大鹿も高井も、14世紀前半には古文書に出てくる古い地名です。

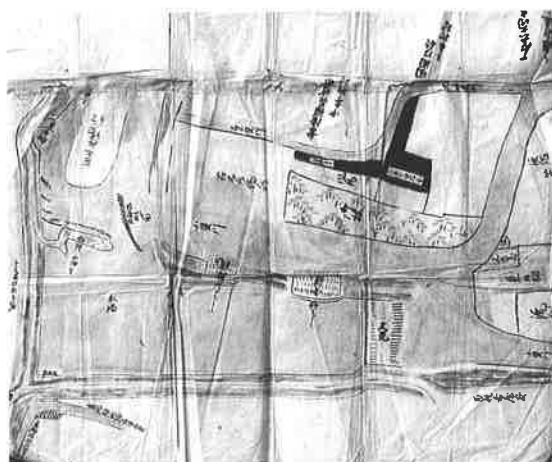
第4章 江戸時代の取手

天正18年（1590）、豊臣秀吉により小田原の後北条氏は滅ぼされ、徳川家康が江戸に入り関東各国を治めます。家康は積極的に領国の経営にあたりますが、これまで未開の地であった大河川の流域の新田開発を進めます。取手市域の多くの村は、この時に成立しました。また江戸と水戸を結ぶ水戸街道が整備され、取手宿と藤代宿には本陣が置かれました。一方江戸を中心とした河川水運網が整備され、取手は水陸交通の要として、人や物資の集散地となりました。現在の取手市発展の基盤は、江戸時代に築かれたといっても過言ではありません。

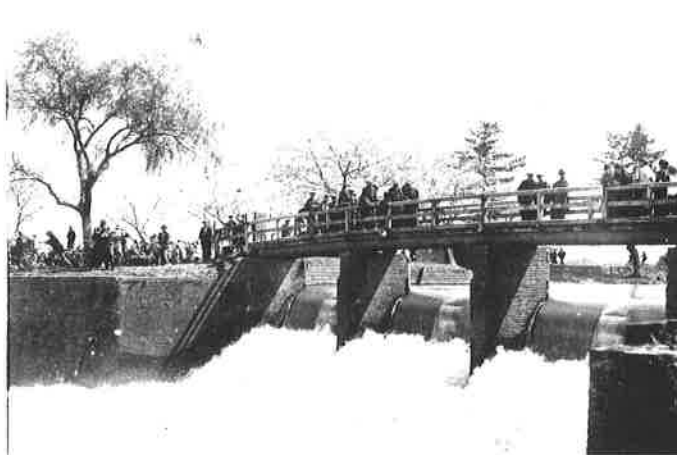
1. 岡堰と相馬二万石の成立

現在の取手市の小貝川流域一帯は、江戸時代はじめの河川の改修や用水路・悪水路（排水路）の開削によって開発されました。これらの事業を行なったのが、関東郡代の伊奈忠治です。すなわち寛永2年（1625）から7年にかけて、現在のつくばみらい市寺畑で合流していた鬼怒川と小貝川が分離され、小貝川は取手市と利根町の間で利根川に流れ込むように改修されました。さらに寛永7年には岡堰が設けられ、相馬二万石の開発が進められたのです。江戸時代の岡堰用水組合の構成村は32か村は、すべて取手市域の村です（大留村と高須村の一部は、現在龍ヶ崎市）。また小貝川の堤防の普請組合は、この32か村に上高井村と下高井村が加わり、34か村で構成されていました。

また市内の久賀地区の村々は、現在でも福岡堰からの用水を使用しています。福岡堰の前身となる山田沼堰（つくば市銅島新田付近）も、伊奈忠治により寛永2年に設置されました。山田沼は、享保年間に入ると新田開発されることとなり、享保7年（1721）には下流の福岡村（現つくばみらい市）に堰が新設され、ここに用水がたくわえられるようになったのです。福岡堰の用水を使用する村は70か村で、福岡堰用水組合を構成していました。取手市内では久賀地区の9か村が、福岡堰用水組合の構成村でした。



岡堰の絵図（取手市教育委員会所蔵）



レンガ堰時代の岡堰（故成島志げ氏所蔵）
明治32年に修築された堰です。

2. 本多作左衛門重次

「一筆啓上 火の用心 お仙泣かすな 馬肥やせ」の簡潔な手紙の作者として知られる本多作左衛門重次は、江戸時代の初めに取手に領地を得ています。天正18年（1590）に徳川家康が関東に入ると、重次は上総国古井戸（現在地不明）に三千石の領地をたまり、諸役を許されました。後に領地は取手市内の井野に移され、ここで慶長元年（1596）に68歳で没しています（生まれは享禄2年、1529）。菩提寺は市内青柳にある本願寺で、市内台宿にあるお墓は、昭和9年（1934）に県の史跡に指定されています。

重次の子の成重は、慶長5年の関が原の合戦で戦功をあげ近江国蒲生郡に二千石を加増され、慶長18年には福井藩主松平忠直の家臣となり、四万石をたまり丸岡城に入ります。元和9年（1623）、松平忠直の不行跡で福井藩がとりつぶされると、翌年成重は六千三百石を加増され、はれて四万六千三百石で丸岡藩主となります。

成重の後には重能、重昭、重益と続きますが、重益の時に家臣間に争いが起こり、これが原因で元禄8年（1695）丸岡藩はおとりつぶしとなります。重益は宝永6年（1709）に許され、翌年6代將軍徳川家宣に拝謁して下総国相馬郡に二千石の領地をたまわります。この領地は、市内の青柳・桑原・和田村にありました。旗本となった本多氏は、以後代々この二千石の領地を治めて、明治維新をむかえています。



頼山陽著「日本外史」（海老原恒久家文書）
元禄8年に、本多重次が三河三奉行の一人に任命されたことが書かれている頁です。



一筆啓上の碑（本願寺境内）
本多重次が、このような手紙を本当に書いたかははっきりしていません。

3. 水戸街道と取手・藤代宿

江戸時代初めの取手の町並みは、守谷と佐倉を結ぶ「佐倉道」に沿って利根川の河原の方に向かってありました。ところが寛文6年（1666）の利根川の大洪水で被害を受けたため、利根川に平行する町並みに改められたのです。ところで江戸時代はじめの水戸街道は、我孫子からは東に向かい布佐で利根川を渡り、布川から北に向かっていました。この街道沿いには、今なお一里塚の跡や伝承地が残り、江戸時代の初めには重要な街道であったことがわかります。この街道が、後に我孫子から北上して利根川を渡り、取手から藤代に達するように改められたのです。取手から藤代に至る道は、先に見た伊奈忠治による新田開発の時に、その原型がつくられたと考えられます。

さてこの水戸街道の付け替えにともない、大鹿村の人びとは街道沿いに移住してきました。大鹿村の移住は元禄10年（1697）には終了したようで、この時から利根川の渡船場が現在の大利根橋のあたりに設けられました。

延宝6年（1678）2月、水戸から江戸に戻る水戸藩2代藩主の徳川光圀が、藤代宿に宿泊したとの記録があるようです。また天和2年（1682）10月、江戸から水戸に向かう光圀が、取手を通ったことが史料から確認されます。しかし、翌天和3年に水戸から江戸に戻る光圀は、潮来から船に乗り布佐で上陸しており、取手・藤代は通っていません。取手の染野家が水戸徳川家から本陣に指定されたのが貞享4年（1687）とされていますので、17世紀の後半頃に次第に水戸街道が取手や藤代を通るようになり、それにあわせて宿場として整備されていったと考えられます。



藤代宿本陣（野々下甲子男氏所蔵） 昭和30年頃の撮影です。残念ながら、この建物は解体されてしまいました。

第5章 明治・大正・昭和の取手

明治維新により、日本は近代国家への歩みを始めます。何度かの県の変遷を経て、市域の町村は明治8年5月に茨城県となりました。また明治・昭和・平成の市町村合併を経て、現在の取手市がつくられました。

また水運・鉄道・道路の交通が発達し、江戸時代以来の交通の重要地点としての取手の地位は、明治以降も揺るぎませんでした。また産業・商業も盛んになり、明治20年代以降、多くの会社が設立されました。

1. 県の移り変わり

慶応4年（1868）6月27日、新政府の最初の地方官である常陸知県事が任命され、久賀地区の根新田が常陸知県事の管轄となっています。8月8日には、下総知県事が任命され、市内の30か村が下総知県事の管轄となっています。翌明治2年（1869）1月13日、下総知県事の管轄地は葛飾県（県庁は流山）となり、2月9日には、常陸知県事の管轄地は、若森県となりました（県庁はつくば市）。

明治4年7月14日に廃藩置県が行われると、現在の茨城県内には葛飾県・若森県に加えて18の県が成立しました。次いで11月13日には、改置府県と呼ばれる大規模な府県の統廃合が断行され、県内では茨城県（県庁は水戸）と、新治県（県庁は土浦）が設置されました。この時、久賀地区の村むらは新治県に、久賀地区以外の市内の村むらは、印旛県となりました（県庁は流山）。明治6年6月15日、印旛県と木更津県が合併して千葉県が成立し、印旛県であった市内の村むらは、千葉県となったのです。明治8年5月7日、新治県は廃止され、利根川がほぼ茨城・千葉両県の県境となりました。ここに市内の村むらは、すべて茨城県となり現在に至っています。

明治初年藩県所管変遷表（旧取手市域）

国郡	年代	幕末期	慶応4.8.8 知県事任命	明治2.1.13 葛飾県設置	明治3.2	明治4.7.14 廃藩置県	明治4.11.13 改置府県	明治6.6.15 千葉県設置	明治8.5.7	
下総相馬	寺田	田安領	田安藩	→	葛飾県	→				
	桑原	旗本領	下総知県事	葛飾県	→					
	台宿	関宿藩	→	→	→	関宿県				
	取手	旗本領								
	大鹿	旗本領	下総知県事	葛飾県	→	→				
	井野	幕府領								
		旗本領								
	関宿藩	→	→	→	関宿県					
	佐倉藩	→	→	→	佐倉県					
	青柳	旗本領	下総知県事	葛飾県	→	→				
	長兵衛新田	旗本領								
	吉田	関宿藩	→	→	→	関宿県				
	小文間	旗本領	下総知県事	葛飾県	→	→				
		佐倉藩	→	→	→	佐倉県				
	野々井	田安領	田安藩	→	葛飾県					
		田安領								
	福	幕府領	下総知県事	葛飾県	→	→				
		田安領	田安藩	→	葛飾県					
	米ノ井	幕府領	下総知県事	葛飾県	→	→				
	戸頭	高岡藩	→	→	→	高岡県				
関宿藩		→	→	→	関宿県					
貝塚	幕府領									
	旗本領	下総知県事	葛飾県	→	→					
下高井	幕府領									
	旗本領	下総知県事	葛飾県	→	→					
高地	高岡藩	→	→	→	高岡県					
	田安領	田安藩	→	葛飾県	→					

同地は現守谷市

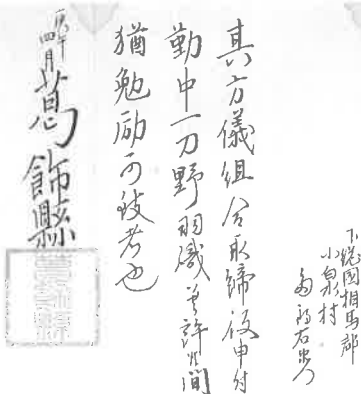
明治初年藩県所管変遷表（旧藤代町域）

国郡	年代	幕末期	慶応4. 知県事任命	明治2. 県の設置	明治3.10	明治4.7.14 廃藩置県	明治4.11.13 改置府県	明治6.6.15 千葉県設置	明治8.5.7
常陸筑波	栗山	旗本領	常陸知県事	若森県	→	→			
	城中	旗本領							
		前橋藩	→	→	→	前橋県			
	足高	前橋藩	→	→	→	前橋県			
	浜田	土浦藩							
	上萱場	土浦藩	→	→	若森県				
	下萱場	土浦藩							
	根新田	幕府領	常陸知県事	若森県	→				
	孫左衛門新田 徳右衛門新田	前橋藩	→	→	→	前橋県			
下総相馬	小泉	旗本領	下総知県事	葛飾県	→	→			
	百井戸	旗本領	→	→	→	高岡県			
	酒結	旗本領	下総知県事	葛飾県	→	→			
	毛有	旗本領	→	→	葛飾県				
	洪沼	高岡藩	→	→	→	高岡県			
	中谷原	旗本領	下総知県事	葛飾県	→	→			
		高岡藩	→	→	→	高岡県			
	米田	高岡藩	→	→	→	高岡県			
	谷中	旗本領							
	小浮気	旗本領							
	高須	旗本領	下総知県事	葛飾県	→	→			
		大置	旗本領						
	神浦	幕府領							
		旗本領	下総知県事	葛飾県	→	→			
	平野	幕府領							
	宮和田	旗本領	→	→	→	淀県			
		淀藩	→	→	→	葛飾県			
	藤代	土浦藩	→	→	→	→			
	片町	旗本領	下総知県事	葛飾県	→	→			
		旗本領	→	→	→	高岡県			
栢木	高岡藩	→	→	→	高岡県				
配松	旗本領	下総知県事	葛飾県	→	→				
	旗本領	→	→	→	→				
中内	土浦藩	→	→	→	→				
	旗本領	下総知県事	葛飾県	→	→	一宮県			
山王	一宮藩	→	→	→	→				
	高岡藩	→	→	→	高岡県				
和田	旗本領	下総知県事	葛飾県	→	→				

常陸知県事の任命は慶応4年6月27日、下総知県事の任命は8月8日

葛飾県の設置は明治2年1月13日、若森県の設置は2月9日

栗山・城中・足高は現つくばみらい市



明治3年4月 葛飾県取締役符令（染野修家文書）



大正2年 常総鉄道開業記念絵はがき(個人蔵)



昭和3年9月 大利根橋起工式の記念品の扇子(取手市教育委員会所蔵)
絵と文字は、小川芋銭の筆になります。

昭和34年撮影の吉田地区の水戸街道(取手市教育委員会所蔵)
江戸時代の面影を多分に伝える光景です。



昭和13年1月1日 取手町商店案内 福徳円満壽吳録(取手市教育委員会所蔵)
「祝皇軍出征」、「祈武運長久」の文字からは、優雅な名称とは裏腹に、前年から始まった日中戦争の暗い影が、人びとの生活に忍び寄っていたことがうかがえます。